

Ganto Tennis

第41号

文責：佐々木雄介

NOT UP

市井しせいのテニスクラブや、余暇に楽しみながらボールを打ち合うようなラリーでは、例えば相手が打ち損じて浅くなったボールを2バウンドで打ち返すような光景をしばしば目にする。試合ではないのだから、2バウンドでもラリーは続けられるわけで、いちいちラリーを止めて打ち直すのは非効率だし、せっかく気持ちに乗って打ち合っているラリーがストップするのは不愉快なことでもある。しかし、私の知る多くの高校や大学、そして岩東男子テニス部では、ストローク練習での2バウンドを認めない。それは何故だろう？・・・「いつも試合と同じ気持ちで練習すべきだから」などと、わかったふうな理屈で短絡してもらっては困るのだ。

試合で、時間的な“効率”を意識してプレーする人はいない。しかし、練習での時間的な“効率”は、向上を目指すチームにとっては死活問題でもある。強いチーム、本気のチームであるほど球拾いは素早し、練習をする上での一つ一つの動きがきびきびとしている。また、試合では、ラリーが途切れなく長く続くこと自体に特別な意味があるわけではない。しかし、練習でラリーを長く続けられることは上達あかしの証でもあるし、集中した長いラリーは、持続する集中の長さを根拠にして、練習を楽しくする。つまり、練習でのラリーは長いに越したことはないのだ。

それでは試みに、「練習では2バウンドのストロークも認める」という申し合わせでラリーをするとしたらどうだろう。もちろん（できれば1バウンドで打つに越したことはない）という括弧書きかっこの前提を付けた上での話である。ラリーが途切れない分、練習は効率化し、途切れることのない楽しいラリーが幾分かは長く続くに違いない。しかし、ここで“効率”は、（できれば1バウンドで打つに越したことはない）という大切な前提を押し潰つぶしてしまうのだ。1バウンドで追いつくかどうかわからないボールを追いかけて、不安定なストロークをするよりは、2バウンドで打ちやすい高さに弾んだボールを打つ方が、安定したボールを供給しやすいからである。そうすると、練習で優先すべき“効率”の大義名分のもと、一瞬の判断の中で、不確実な1バウンドより、確実な2バウンドを選ぶのは、人としてありがちな成り行きでもある。その結果、追いかけたところで追いつくはずがないのだから、追いかけても仕方がない、という救いがたい怠惰が“効率”を隠れ蓑にして正当化され、大手を振って歩き始めるのだ。

追いつかないとわかっているボールを、意識して（理想としては無意識に）追いかける。そのメンタリティつちかを培うことは、死活問題としての“効率”をも超えて遥かに大切なファクターなのだ。「今の力では、あのボールには絶対に追いつけない」という判断は正しい。それは「今の実力では全道大会の札幌勢には通用しない」という分析・判断が正しいのと同じ理由で、動かしがたい事実なのだ。しかし、今の力では追いつけないボールを追いかけるのを無駄だと考えるとしたら、それは、今の実力では及ばない「全道大会で札幌勢を倒す」という目標を追いかけるのも無駄だということになってしまう。